

批評

加藤旭人 著『障害者と健常者の関係形成の社会学 ——障害をめぐる教育、福祉、地域社会の再編成と障害のポリティクス』

(花伝社 2023 年)

大 橋 一 輝*

本書は、1990年代以降の東京都多摩地域で障害者の余暇支援をおこなうX会を事例として、障害者と健常者の関係形成の動的な過程を考察した著作である。著者である加藤旭人は障害にかんする従来の社会学的研究を、障害者運動研究とその批判としてのライフストーリー研究のふたつに大別する。前者は障害（disability）の解消戦略を志向し、後者は軽度障害を中心に多様な障害をもつ個人の経験に着目する。これらの研究に対して加藤は、多様なアクターの経験と社会制度との関わりが捉えきれていないとして、批判的障害学の論者であるアリソン・ケーファーによる障害の政治／関係モデルが援用される。障害の政治／関係モデルでは、社会モデルが前提とする損傷（impairment）と障害（disability）の二項対立の構図は棄却され、障害はあらゆる社会空間で生起しうる現象とみなされる。加藤は、こうした関係論的視点とフォーコーの権力論を接続した「障害のポリティクス」、すなわち「障害をさまざまな実践のせめぎあいの場」（p.57）と捉える新たな視座を用いる。本書は、こうした視座に立って、余暇支援から地域社会、そして教育政策・福祉政策にいたる広範な社会空間を対象として、社会政策と社会運動との関係を捉えるための視点を提示した出色の著作である。

本書は、序章と終章には含まれた第1章から第5章で構成される。序章「現代における障害をめぐる教育、福祉、地域社会の再編成」では、研究対象と研究方法が提示される。加藤が研究対象のX会をとりまく社会背景として示すのは、1990年代以降の障害をめぐる教育政策と福祉政策の変化である。教育政策の面では、学校週五日制の導入による学校教育領域の縮小、さらに社会教育から生涯学習体系への移行などが生じる。福祉政策の面では、福祉サービスは社会福祉基礎構造改革を受けて、行政を主体とする措置から契約へと転換する。X会はその背景から、1992年に東京都立立川養護学校に通う障害者の保護者と教員によって、障害者の余暇支援を目的とする団体として結成される。こうしたX会をとりまく教育政策と福祉政策の展開は、おもに行政が発行する公的資料によって示される。あわせて、X会を対象としたフィールドワークによって、X会の活動は障害者や指導員などの多様なアクターの姿とともに詳細に描き出される。

第1章「障害者と健常者の関係形成をめぐる理論的視座」では、障害の社会学的研究を概観しつつ、分析課題がふたつ提示される。第一の分析課題は、「1990年代以降における新自由主義的な行財政改革を背景にもつ教育政策と福祉政策、およびそれとの共変動としての社会運動の対立、連携、妥協といった相互交渉の展開は、障害者と健常者の関係形成にかかわるどのような構造的な制約と可能性をもたらしたのか」（p.62）である。第二の分析課題は、「社会政策と社会運動の展開の帰結としてもたらされた構造的な制約と可能性は、障害者と健常者の関係のあり方をどのように再編成したのか。とりわけ、関係性のあり方を枠づけようとする構造的な力学と、個々の社会的な文脈における関係のありようのせめぎあいのなかで、どのような障害者と健常者の関係性が創出されているのか」（p.62）である。

第一の分析課題は、第2章「東京都多摩地域における学校週五日制の導入と地域活動の展開」と第3章「市民活

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2023年度入学 共生領域

動の形成と福祉事業化の社会的過程」で検討される。第2章では、養護学校に導入された学校週五日制が背景となり、保護者と教員の協力関係がX会の発足にいたる過程が示される。学校週五日制の導入による長期休暇や放課後活動の困難は、子どもたちの余暇をめぐる保護者と教員の「共通の痛み」(p.95)として共有される。その両者の経験は、学校週五日制への対応としての地域活動の実施、さらには社会教育行政と関係しながらX会の活動開始へと結実する。

第3章では、1990年代後半から2000年代のX会とX会の関連団体Yの動向に着目して、その活動場所が学校から地域社会へと移行する過程が示される。X会は、活動人員の不足に直面すると、市内公立小学校のPTAに呼びかけて協力関係を構築する。団体Yは、X会が社会教育行政の公的支援を得る過程で、X会を支える市民団体として結成される。しかし、障害児の余暇支援の充実を念頭に活動する団体Yは、ボランティアと保護者の関係性や障害児の生活課題の解消といった、数多くの課題をかかえるようになる。その結果、団体Yは福祉事業化へと至り、ボランティアを中心とするX会と支援を中心とする団体Yとのあいだでは、障害者と健常者の関係形成のあり方は異なる原理のもとで模索されるようになる。

第二の分析課題は、第4章「障害者の地域活動をめぐる共同性の創発的基盤の形成」と第5章「障害者の音楽活動における参加者の即興的相互作用」で検討される。第4章では、X会の理念とX会の参加者による活動への意味づけに着目して、X会はどのように障害者や指導員を含む多様なアクターを地域社会に結びつけているのかが示される。X会の理念によるとアクターの存在は、「しょうがいのある人たち」(p.177)や「地域の人々」(p.177)など、抽象的に表現される。このような一見すると曖昧な理念は、各アクターによるX会の活動に対する固有の意味づけを許容しつつ、障害者との関係性を個々人に開くものとして機能する。

第5章では、X会の音楽活動の場を対象として、障害者と健常者の関係性において生じる「できる／できないをめぐる非対称性」(p.202)を流動化させるしくみが検討される。X会の音楽活動の方針では、「個人の技術があがっていくこと」(p.211)より、「地域に開いた活動の場」(p.211)であることが優先される。障害者と健常者の非対称性は、音楽活動内の自己紹介では指導員が参加者の自己表現を傍観することによって、セッションでは各参加者が音楽の即興演奏をおこなうことによって、一時的に無効化される。こうしたX会の取り組みは、状況依存的ではあるものの、障害者と健常者の関係性を枠づける社会構造とは異なる位相のもとで実施される。

終章「障害をめぐるせめぎあいの帰結」では、各章を要約しつつ、障害は社会構造上の力学が介入する場として存在し、それをとりまく意味は多様なアクターが参加する社会運動の場を通して再想像されると結論づけられる。

以上でみてきたように、本書は批判的障害学の理論を「障害のポリティクス」として彫琢しつつ、障害者と健常者の関係形成の過程を実践の現場と社会制度との関連をもとに、緻密に記述した力作である。本書を通して、障害者の地域活動の現場で活動する多様なアクターの経験は、それをとりまく地域社会や教育・福祉政策の動向と密接に関連することが明示された。しかし同時に、余暇支援の現場でみられる障害者と健常者の関係性は、マクロレベルである社会政策に基づいて規定されるとは限らない場面も示される。したがって本書は、障害者と健常者の関係形成を主題として、社会政策と社会運動との関わりを文脈依存的な事象も内包しつつ、それをきわめて動態的な営みとして捉え直したものといえよう。

結びに、本書が有する研究史上の意義と課題として、人びとの相互作用の水準を扱うミクロ分析に着目しつつ、以下の2点について言及したい。1点目は、多様なアクターの一員としての加藤がもつフィールド経験の提示である。加藤は、研究に取り組む以前に支援者としてX会に関わっていたことから、「支援者／研究者」(p.24)の立場からX会での質的調査を長期にわたって実施する。本書でおもに記述されるのは、障害者と指導員をはじめとするX会に参加する人びとの相互作用である。しかし、そこでは加藤とX会の参加者とのあいだで生じたはずの相互行為は記述されず、調査者がもたらす相互作用の場に対する影響については不明瞭である。「支援者／研究者」としての加藤の立場性は、加藤自身をアクターとして含めつつ、X会の参加者とのあいだでみられた相互作用を記述することで、より明確に示せたのではないだろうか。

2点目は、障害者の経験を含めた障害の再想像をめぐる可能性である。本書は「障害のポリティクス」に基づき、社会モデルにおける損傷 (impairment) と障害 (disability) の二項対立の構図に依拠することなく、障害をめぐる社会的状況を記述する。それにより障害は、「アクティビズムの取り組みによって意味が再想像される集合的な

大橋 加藤旭人 著『障害者と健常者の関係形成の社会学——障害をめぐる教育、福祉、地域社会の再編成と障害のポリティクス』
場」(p.268)として再提示される。しかし、加藤も終章で記すように、社会運動や社会政策との関係が希薄なアクターの存在はあまり扱われていない。たとえば、X会の参加者のうち、とくに多くの知的障害者の存在は後景に退くことになる。障害が生起する場面を幅広く視野に含めつつ、社会モデルでは捉えることが難しいとされた障害者の経験はいかにして記述できるだろうか。加藤によるミクロな相互作用の場を規定する社会構造の指摘をふまえつつ、社会参加が困難な障害者の存在を含めて、障害の現象を捉えるための方法論を検討することは今後の課題となるであろう。

とはいえ、これらの指摘は、加藤による新たな試みから生みだされたものである。本書を受けて、障害をめぐる社会過程は動的に捉えることが可能となり、障害を主題とする社会学的研究の新たな視座が切り開かれたといっても過言ではない。ぜひ多くの方々に参照していただきたい。

